

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 17 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520038

研究課題名(和文)唐代道教論書の研究

研究課題名(英文)Study on the Daoist Catechisms in Tang Dynasty.

研究代表者

麦谷 邦夫(MUGITANI, KUNIO)

京都大学・人文科学研究所・名誉教授

研究者番号：90114678

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：唐代の代表的な道教教理思想に関する問答議論の書(論書)である『玄珠録』『道体論』『三論元旨』などについて、その教義問答の背景にある仏教教理学の影響と道教独自の教理思想的展開の営みの跡を明らかにし、六朝隋唐時期の中国思想史の全面的理解のための手掛りを明らかにした。また、上記三書の詳細な訳注稿の作成を行って、今後の研究のための基礎的資料を提供した。

研究成果の概要(英文)：Xuanzhulu, Daotilun and Sanlun Yuanzhi are the typical Daoist catechisms in Tang dynasty. By studying these Daoist catechisms, I investigated the influence of Buddhist school behind them as well as the unique developmental process of Daoist thought. In addition, I revealed some clues to understand the history of Chinese thought from Six dynasties to Sui-Tang dynasty. The basic materials for future research were also provided through making translations and annotations of these three catechisms.

研究分野：中国哲学

キーワード：道教 論書 玄珠録 道体論 三論元旨

## 1. 研究開始当初の背景

中国思想史の中で、六朝隋唐時期は儒教、仏教、道教の三教が相互に交渉しながら、それぞれの教理や思想を展開し、中国人の精神生活に多大な影響を与えた時代である。とりわけ、中国固有の民族宗教として自己形成を遂げた道教は、この時代を通じて仏教教理思想の強い影響下にその教理思想を展開していった。最終的には、唐代における道仏論争などを通じて独自の教理思想体系を確立するとともに、専門道士の手になる教理書である論書が数多く撰述された。それらの論書が、どのような思想史的背景を有し、儒仏二教との交渉の中でどのように教義を深めていったのかは、この時期の思想史を解明するうえで欠くことのできない重要な問題を含むが、従来十分に解明が行われてこなかった。こうした研究史上の欠落部分を補うことは、中国思想史全体を理解するためには必要不可欠な作業である。本研究では、唐代の代表的な論書である『玄珠録』『道体論』『三論元旨』などを対象にこうした問題を解明することを目指した。

## 2. 研究の目的

本研究は、唐代に仏教論書に倣うかたちで作成された道教論書がどのように三論や地論あるいは天台や華嚴などの仏教教理を咀嚼し、道教教理の中心概念の理論付けに応用していったのかを明かにし、唐代における道教教理の展開過程における道仏二教の交渉の諸相を明かにすることを目的とする。

道教教理は、南北朝末から隋唐初にかけて仏教教理の強い影響を受けつつその体系を形成していった。その最初の成果は、『太玄真一本際經』や『海空智藏經』などの經典類および『玄門大義』や『道教義枢』といった道教類書の中に見ることができる。この時期の道教教理体系の中には、いまだ未消化の生々しい仏教教理の影響の跡が見てとれる。盛唐期に入ると道教側の仏教教理に対する理解は急速にその程度を深め、やがて仏教論書に倣うかたちで、道教教理を専門に論ずる道教論書の出現を見るに至った。その代表的なものには、王玄覽の『玄珠録』、作者不明の『道体論』や『三論元旨』などがある。しかし、従来の研究でこれらの論書を正面から取り上げて、中国の思想史の中に位置付けようと試みたものは極めて少ない。本研究では、これらの道教論書がどのように三論や地論あるいは天台や華嚴などの仏教教理を咀嚼し、道教教理の中心概念の理論付けに応用していったのかを明かにし、唐代における道教教理の展開過程における道仏二教の交渉の諸相を分析して、未解明の部分が大きい唐代の宗教思想史を広汎な視野から解明することを目的とする。

本研究では、以上の目的を遂行する最初の

手掛かりとして、『玄珠録』、『道体論』、『三論元旨』の三書を考察の対象とする。三書には共通して仏教の三論学派の影響が見られるが、それ以外にも、『玄珠録』には法相宗や華嚴宗の影響が、『道体論』には地論宗の影響が比較的強く見られる。『三論元旨』がどのような仏教宗派の影響を強く受けたのかについては、現段階では明確な見通しは得られていない。こうした状況を踏まえて、これらの論書に見られる仏教教理がいかなる思想基盤の上にどのように導入されてきたのかについて理解するための手掛かりを、詳細な文献解読による訳注作成作業と当時の道仏二教の間の思想交流の状況を詳細に検討することで解明する。

従来の道教研究や思想史研究の中では、この時期の道仏二教間における教理思想上の影響関係を十分に解明してきたとは言えない。そこには、資料的制約が相当に存在したことも事実であるが、それ以上に、思想の表面的な影響関係の指摘から一步踏み込んで、その深層部における影響関係をきちんと解明する準備が不足していたことが主要な要因となっている。本研究が目指すのは、このような深層部における影響関係を明確にすることであり、これによって道仏二教交渉の思想史的研究が確実にレベルアップするとともに、唐代思想史の再構成に対する大きな寄与が期待できる。

## 3. 研究の方法

唐代の代表的な道教論書である、『玄珠録』『道体論』『三論元旨』を解読し、その思想体系の中に取り込まれた仏教教理がどのようなものであったのか、また、六朝以来の道教固有の思想概念とどのように絡みあって、新たな思想的展開を見せていったのかを、思想史的観点から明らかにする。

平成24年度は、まず『玄珠録』を分析の対象とし、その詳細な訳注を作成する。『玄珠録』には、蜀の地で展開したと思われる仏教教理の影響が強く見られるが、その仏教教理がどのようなものであったのかは必ずしも明らかではない。それゆえ、王玄覽の時代の蜀の仏教界の実態を僧伝などの記述を詳細にたどることで明かにした上で、『玄珠録』に影響したと思われる仏教教理のソースを探るとともに、それらの影響下に「道」や「徳」や「自然」といった道教固有の概念がどのように理解されたのかを分析する。

平成25年度は、主として『道体論』を分析の対象とし、その詳細な訳注を作成する。『道体論』は基本的に『老子』に関する講義録であり、成玄英や李榮などの『老子注』とは全く体例を異にする「論書」の形式をとる。そこでは、「道」「徳」などの『老子』の中心概念について、「体」「用」をはじめとする仏教の教理概念を用いた解説が試みられている。これらの分析を通じて、唐代思想史を考

える上で大きな要素を占める『老子』解釈の場で、道仏二教の教理がどのような交渉を持ったのか、とりわけどのような仏教教理が影響を与えたのかを明かにする。

平成26年度は、『三論元旨』を分析の対象とし、その詳細な訳注を作成する。初年度、二年度と同様に、主としてどのような仏教教理がその思想構成に影響を与えているのを詳細に検討するとともに、道教教理として不変な核心部分が何かを明かにする。最終的には、この三種の道教論書を通じて、仏教教理の影響を受けて変化した概念と変化しなかった概念を切り分け、道教教理の特質が何かを抉り出すとともに、唐代における道仏二教の間における教理上の交渉の諸相を明かにすることを旨とする。

#### 4. 研究成果

まず、『玄珠録』の分析を通じて明らかにされた研究成果としては、

(1)『玄珠録』には、初唐の蜀を中心とする地域仏教文化の独自性が色濃く反映されていること。

(2)『玄珠録』に記録された道教教理思想には、それを講じた王玄覽個人の思想遍歴のあとが反映されていること。

(3)六朝末から隋唐時期にかけて道教教理の形成に大きな影響を与えた三論学派の教理思想や論法の強い影響下にあること。

(4)それにもかかわらず、王玄覽が学んだ三論学派の論法であり、後の道教にも大きな影響を及ぼした「八竝」論法は全く反映されていないこと。

(5)このことと関連して、最近、中国国文学者が提出した王玄覽が『玄珠録』以外に中国国家図書館蔵BD04687号敦煌文献を撰述したであろうという説が誤りであること。

などが挙げられる。

また、訳注作成の過程を通じて、『玄珠録』の文体が他の道教論書とはかなり相違した独自のものであり、蜀の口語方言のあとを濃厚に残すものであることも明確になった。

次に、『道体論』の分析からは、およそ以下のような点が明らかになった。

(1)『道体論』の主題とする「道体」が、六朝後半から隋初唐時期にかけての道教教理のなかで語られてきた「道」の体用および「道」「気」「神」の三位一体論との関係においていかなる思想史的位置づけを有するものであるかについて、『道体論』における「道体」の概念は、確かに従来の道教教理と同様に、三論や中観といった仏教教理における真理のありかたに関する議論との関連性を有するものであること。

(2)その一方、このような概念を超克しようとする意図のもとに、『老子』における「道」の概念を独自の観点からより深く詳細

に追究しようとするものであること。

これらのことから言えるのは、『道体論』が中唐以降における道教教理の独自性の追求という思想史的営みの延長線上に位置するものであり、体用概念の援用において新たな可能性を追求する有力な試みのひとつであったことである。

次に、『三論元旨』の分析からは、およそ以下のような点が明らかになった。

(1)『三論元旨』が取り上げるのは、「道宗」「虚妄」「真源」などの基本概念とそこから派生してくる「道性」「自然」「因果」「妙本」「坐忘」など、従来の道仏論争の中で頻りに取り上げられてきた重要な問題点に関する議論であり、『玄珠録』や『道体論』などと共通の思想的基盤を有すること。

(2)「道」の本体に関しては、『三論元旨』は『道教義枢』などに見られた「道、理也」という解釈をさらに発展させて、「虚妄」「神」「性」との一体性を主張していること。

(3)「自然」と「因果」の関係については、『三論元旨』は玄宗の『老子注疏』の延長線上において、「妙本」概念を核とする両者の融合論を発展させていること。

(4)『三論元旨』の論証過程での経証には、主として『本際経』や『西昇経』、『業报経因縁経』などの唐代に盛んに用いられた道教経典が使用されていること。

以上のことを総合的に勘案しつつ、これらの特徴と玄宗の『老子注疏』などとの関係を考慮に入れると、諸説が存在する『三論元旨』の成立年代については、ほぼ8世紀半ば以降唐末までの間と推定して間違いのないことが明らかになった。

なお、本研究のいま一つの成果としては、『玄珠録』『道体論』『三論元旨』の詳細な訳注稿が作成された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

1. 菱谷邦夫 『道教義枢』序文に見える「王家八竝」をめぐって—道教教理學と三論學派の論法— 『中國思想史研究』33号 pp.39-74 2012年12月 査読無

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：

番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

麥谷 邦夫 ( MUGITANI KUNIO )

京都大学・人文科学研究所・名誉教授

研究者番号：90114678

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：